

さわらないで!-こんな虫にご用心-

大阪市内では、都市化にともないスズムシやカブトムシなどの昔なつかしい昆虫を目にすることがめっきり少なくなりました。

しかし一方では、公園のクスノキにはアオスジアゲハの幼虫が育ち、サザンカではチャドクガの幼虫が、小学校のプールでは冬の間、トンボになることを夢見てじっとヤゴが暮らしています。

このように、私たちの身の周りには、姿や形、色や大きさなどいろいろな虫たちが、残された自然の中で懸命に生きています。

虫たちは、自然を感じさせてくれると共に、自然界のバランスを保つために重要な働きをしています。しかし、私たちにとってありがたくない毒を持つ虫たちも市内で見うけられます。このような虫たちを見つけた場合、近づかない、さわらないなどの注意が必要です。

① マツカレハ



- 成虫は6～10月にかけて年に1回発生します。
- クロマツやアカマツ、ヒマラヤスギに産みつけられた卵からかえった幼虫は、10月下旬頃より樹皮の裂け目や樹の根元などでかたまって冬を越し、4月頃から活動を始め、6月にまゆを作ります。
- 幼虫やまゆには毒のある毛があり、触れると赤く腫れ、激しいかゆみが5～10日間続きます。
- 炎症がおこった場合は虫さされ用の軟膏を塗りますが、かゆみがひどいときは医師の診察をうけましょう。

② チャドクガ



- 卵で越冬し、4月に卵からかえった幼虫は、茶、サザンカ、ツバキなどの庭や公園に多く植えられている植物を食べて成長します。成虫は6～7月と10月頃の年に2回現れます。
- 幼虫・成虫ともに毒のある毛を持つので、触れると赤く腫れ、激しいかゆみが2～3週間続きます。
- 炎症がおこった場合は虫さされ用の軟膏を塗りますが、かゆみがひどいときは医師の診察をうけましょう。
- また、幼虫がいなくなった後でも、抜け殻に毛が残っていて被害を受けることがあるので注意が必要です。

③ ヒロヘリアオイラガ



- 年に2回発生します。越冬はまゆ(形からスズメの小便壺と呼ばれます)で行い、まゆは樹の幹や太い枝の下部に付着しています。
- 第1回目の幼虫は6月頃に、2回目の幼虫は8月頃に発生し、サクラ、カエデ、ケヤキ、サザンカ、ウメなどの多くの植物を食べて成長します。
- 幼虫は全身に大小とりまぜた毒のある毛を持っており、これに刺されると飛び上がるほどの激痛を感じます。痛みは2～3日続きますが、大きくはれあがることはありません。

④ スズメバチ (コガタスズメバチ)



- スズメバチはハチの中でもっとも大きく、社会集団生活を営み、大きな丸い巣(外皮のあるボール状で、縞模様が特徴)をつくります。
- 市内においては、コガタスズメバチが最も多く見られ、庭の木や街路樹、人家の軒先などに春から秋にかけて巣を作ります。
- スズメバチ類は、とくに夏から秋にかけて巣を守ろうとする本能が強くなり、巣に近づく人に攻撃をするので、巣に近づかないようにしましょう。
- アレルギー体質のおそれのある人が刺された場合は、できるだけ早く医師の診断を受けて下さい。

⑤ セアカゴケグモ



- オーストラリア、ニュージーランド、東南アジアを中心に生息している毒グモです。平成7年11月に大阪府南部で発見されて以来、大阪市内をはじめ各地で生息が確認されています。
- メスは全体が黒色で、背中の赤い模様が特徴です。攻撃性はなく、毒を持っている牙も短いため、素手で捕まえたりしない限り、咬まれることはありません。しかし、毒性そのものは強く、咬まれた場合は痛みや発赤・発汗を生じます。
- 万一、咬まれた場合は医療機関の診断を受けましょう。また、大阪府立急性期・総合医療センターと大阪市立総合医療センターには血清を常備しています。

⑥ ハイイロゴケグモ



- 世界中の亜熱帯地域に広く分布している毒グモです。セアカゴケグモ同様に各地で発見されています。
- 生息地により、色の変化が大きく、通常は黒色、茶色又は灰色です。また、背中の模様も複雑でいろいろな形があります。

⑦ ムカデ



- 屋外の草むら、落ち葉の下、石垣の間にひそんで、昆虫を餌にしています。夜行性のため、夜間に家の中に入ってきて、その被害にあうことがあります。
- ムカデは接触の刺激に対して敏感で、瞬時に咬みつきます。夜間寝ている間に咬まれたり、野外で不意に咬みつかれるのは、こちらから接触した場合です。
- ムカデの毒は強く、咬まれると激痛があり、赤く腫れます。毒を絞り出し、水で患部を冷やして、薬剤を塗るようにします。

お問い合わせ先